©河北新報社 2009

NIE特集

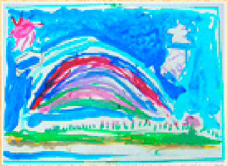
Newspaper In Education

落合小

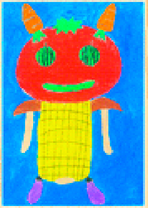
学校名　宮城県大和町立落合小学校　　校　長　黒田　謙二
所在地　宮城県大和町落合相川若木164－1　児　童　64人
電　話　022（345）3004

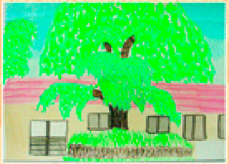
うきうきキャンバス

どっちがかつか
3年・渋谷風歌


ぼくの天気よほう
2年・内海　拓

うさぎ　1年・高橋侑那


野菜人形　6年・文屋裕太


大きなさくらの木
5年・安海怜奈

野球をする女の子
4年・鈴木志歩

郷土の先輩、佐藤忠良さんってどんな人？

少年時代の志を貫く

知り隊

絵画から彫刻の道へ

　みなさん、彫刻家の佐藤忠良さんを知っていますか。絵本の「大きなかぶ」のさし絵を描いた人で、1年生の国語の教科書にも出てきます。わたしたちは、忠良さんがわたしたちのふるさと・宮城県大和町の落合地区で生まれたことを知り、とても驚きました。そこで忠良さんの経歴や作品について調べてみたいと思い、町の文化施設、まほろばホールの学芸員の青木明子さんにお話をうかがいました。

青木さんから、佐藤忠良さんの「母の顔」の説明を受ける（まほろばホール・佐藤忠良ギャラリー）

　わたしたちは、まほろばホールにある佐藤忠良ギャラリーを訪ね、青木さんに作品やビデオを見せていただきながら説明を受けました。

　忠良さんは1912年、落合地区の舞野という所で生まれました。お父さんが病気になり丸森町へ転居、6歳の時にお父さんを亡くしてから北海道の夕張に移ったそうです。「お母さん思いの人で、小さいころから絵を描くのが大好きだった」と言います。

　中学生の時に、将来絵描きになりたいと思った忠良さん。周りに反対されましたが、お母さんだけが「やってごらん」と言ってくれました。最初は油絵に取り組みましたが、ある日、本でロダンなどの作品を見て、自分の進む道は彫刻だと決めました。

　まほろばホールのギャラリーには、「母の顔」や「ブラウス」という彫刻が展示されていました。作品を見ていると、青木さんに「ぐるっとまわって見てごらん」と言われたので、いろいろな方向から作品を見てみました。

　顔のしわや服のしわなど細かい部分まで丁寧に作られていました。「忠良先生は、彫刻は、見たものをそのまま表現するのでなく、どうしたら題材と空間が調和するかを考えながら制作しているそうですよ」と説明してくれました。

　「大きなかぶ」のさし絵の仕事も、子どもたちに本物を見せたいという願いで何度もスケッチを繰り返し、さし絵を完成させたということです。最後まであきらめずに仕事に取り組む話を聞いて、すごいなあと思いました。

◇　◇

　2005年、大和町は町制50周年のインタビューで、東京に住む忠良さんから大和町の子どもたちへ、「汗かいて、恥かいて、失敗して、そして足をふんばって進んでいくことが大事ですよ」というメッセージをいただいたと聞きました。わたしたちも、忠良さんのように、自分の目標に向かってあきらめずに進んでいきたいと思います。

文・瀬戸琴乃、内海麟夏、谷田瀬音（5年）

言い隊

■ キャップで命救おう ■

　みなさんは、ペットボトルの飲み物を飲んだ後、キャップをどうしていますか。私の家では、キャップを洗って集めています。この前、買い物に出かけたお店で「キャップにご協力をお願いします」という箱が置いてありました。よく見てみるとキャップを売ったお金が、外国の病気で苦しむ子どもたちのワクチン代になると書いてありました。

　今、ワクチンさえあれば命の助かる子どもたちは、世界で1日約6000人もいるそうです。1人分のワクチンを購入するためにキャップは800個も必要だそうです。大変な数だけど、一人でも多くの子どもたちの役に立てればいいなあと思っています。（6年・鈴木咲妃）

■ 道路にごみ捨て なぜ ■

　この前、車に乗って買い物にいく途中、道路の中央分離帯にいろいろなごみが落ちているのに気づきました。空き缶、紙くず、雑誌などです。みんなで使う道路なのにとても残念な気持ちになりました。なぜ、大人は「ごみはごみ箱に捨てましょう」といっているのに道路にごみを捨てるのでしょうか。

　何日かして同じ道路を通っていたら、中央分離帯のごみはなくなっていました。きっと誰かが拾ったのでしょう。ごみを捨てる人もいれば、ごみを拾う人もいます。一人一人がもっとごみの始末に気をつければ、投げる人も拾う人もいなくなり、きれいな場所がたくさん増えていくと思います。（6年・佐々木のどか）

教え隊

落合ふれあいまつり

親子講座 毎年楽しみ

昨年開かれた「落合ふれあいまつり」での科学実験講座

　落合小では、毎年10月に「落合ふれあいまつり」を行っています。

　午前中は、各学年の劇や音楽の発表会をして、午後から、おうちの人といっしょにふれあい講座に参加します。昨年は、絵画講座、茶道講座、わら草履作り講座、凧作り講座など七つの講座がありました。講座の先生は、地域の方々がボランティアでやってくれます。どの講座の先生も優しく丁寧に教えてくださるので、みんな毎年楽しみにしています。

文・十文字稜（5年）

編集後記

　佐藤忠良さんは、戦争が終わって3年間、シベリアに抑留されました。抑留中はいつも家族のことや芸術のことを考えながら過ごしたそうです。1948年、船で京都の舞鶴港に入り、家族のいる東京に戻りました。最初に作った作品のモデルが自分の子どもでした。

　わたしたちは、今回の取材を通して郷土の先輩、忠良さんのことをいろいろ知ることができました。忠良さんの作品は、まほろばホールをはじめ宮城県美術館など各地にあります。ほかの所にある作品も見てみたいと思っています。みなさんも、ぜひ見てください。

　この新聞を作るのにたくさんの方にご協力いただきました。本当にありがとうございました。

〈編集委員〉鈴木咲妃、佐々木のどか（6年）、瀬戸琴乃、内海麟夏、谷田瀬音、十文字稜（5年）
題字デザイン　小川春菜（6年）
〈指導教諭〉渕村祐司、鈴木潤

10月は14日（水）、27日（火）の掲載になります　これまでの掲載校の紙面を河北新報のホームページ（ＫＯＬＮＥＴ）で見ることができます。